



一般社団法人 日本顕微鏡歯科学会

第20回学術大会・総会 歯科衛生士シンポジウム

大会長：寺内吉継

実行委員長：表茂稔

顕微鏡を通して～新卒から今～

鷺谷美美子

笠原デンタルオフィス

顕微鏡を用いた精密な歯科治療の需要は年々高まってきており、歯科医師のみならず歯科衛生士も顕微鏡を用いて日々の診療を行うことが多くなってきています。

そのような背景から顕微鏡の導入件数は右肩上がりです。上昇しており、卒業後臨床に出たのと同じようにそれを使用できる機会も増えてきているのではないのでしょうか。かくいう私もその1人で、勤務初年度より顕微鏡を使用する機会に恵まれました。

私の勤務する歯科医院には私以外に歯科衛生士はおらず、入職当初から顕微鏡に自由に触れることができました。その中で院長の勧めもあり、明確に3年後に日本顕微鏡歯科学会の認定衛生士を取得することを目標に使用してきました。先輩の歯科衛生士がいないということで時間の制限なく顕微鏡を使用できる利点はありましたが、『臨床経験もない新卒の話は患者さんは聞いてくれるのだろうか』『患者さんに分かりやすくブラッシング指導するにはどうしたらよいだろうか』など頼るべき先輩がおらず不安に思うことも多々ありました。自ら問題解決しなくてはいけない場面も多い中、結果として顕微鏡はそれらを解決するのに欠かせないものとなりました。

ブランクや歯肉縁下歯石、カリエスまた補綴装置の不適合など拡大視野下でそれらを明示し、記録して映し出せることは顕微鏡の1番の強みであると思います。目視の場合、手指感覚の培われていない新卒では見逃しにつながりやすいと思われませんが顕微鏡の強みを活かすことで、日々の診療の助けになりました。

顕微鏡で記録した映像を患者さんと供覧している際には「初めてこんなに自分の口の中を見ました」「実はここも前から気になっていたところなんです」「この部分は問題ないですか」などコミュニケーションをはかるうえで重要なきっかけとなり信頼関係の構築にも役立ちました。

目標としていた認定衛生士取得後はさらに日々の診療にも自信がつき、コミュニケーションの取り方や説明にも当初と比較し大きく変化があったように感じます。

今回のシンポジウムでは新卒から顕微鏡を使用した結果、患者さんとコミュニケーションをはかる上でどのような助けとなったのか、また認定衛生士を取得してどのように日々の臨床が変化してきたかなどを中心にお話しさせていただきたいと思います。